設楽の賢人（木匠　加藤得二）

本紙第十一号（平成二十二年一月四日発行）で設楽町が生んだ、堂宮大工の匠、本間（旧姓遠山）兼五郎について紹介させていただきましたが、機会を得ましたので、同じ文化財建造物の修復工事に携わって活躍した匠で、同門の加藤得二について紹介したいと思います。

加藤得二は明治三十六年旧段嶺村田内（現・設楽町）の加藤房吉の二男として生を受ける。大正六年、清崎尋常高等小学校を卒業すると、翌年十五歳で兼五郎と同じ牛久保町の堂宮大工、井桁屋棟梁花田源次郎に入門し、宮大工として修業する。以来県内は勿論、静岡県で寺社の新築改修等に携わっていたが、昭和二年二十四歳の時、すでに技官となって活躍していた同郷の兼五郎を頼って上京する。二十七歳の時、文部省の欠員補充に応募して合格、宗教局保存課に勤務する傍ら働きながら日本大学高等工学校建築科（現・日本大学理工学部建築学科）に入学し、建築学を極める。

昭和十一年には、奈良県の技手を兼ねて古社寺修理技手に採用され、寺の解体修理にあたってきたが、昭和十二年日華事変勃発により兵役に召集される。中国戦線におくられ、揚子江を渡って韓口作戦に従軍する。

除隊後本格的に文化財の修復にあたることとなる。

姫路城

昭和十六年十二月八日、対米英宣戦布告、太平洋戦争が始まると再び文化財の修復作業は中断されることとなるが、四年にわたる戦いも敗戦という形で終焉する。戦後の混乱もおさまり始める昭和二十四年、四十六歳の時、文部省法隆寺国宝保存事務所主任技手補を拝命し、伽藍の修理作業に携わる。

翌二十五年には姫路城天守閣の大修理が正式に決定され、姫路城修理事務所も設置されて本格的にスタートした。

姫路城（別名・白鷺城）は鎌倉時代も終焉に向かい、室町時代が始まる頃、赤松貞範が創始したものと伝えられる。慶長十四年徳川家康の娘婿池田輝政がその財力と幕府の権力を後ろ盾に、大改修の末に完成させたのが現在の姫路城の大天守閣である。

昭和六年には国宝に指定され日本最大の木組みの城である。

昭和二十六年七月、文部省人事担当課長、文化財保護委員会建造物課、関野克氏より姫路城修理責任者を拝命する。国宝姫路城天守閣ほか四十九棟の工事主任に選ばれた。

（姫路城第一次六カ年計画、石垣、櫓などの修理）

昭和二十八年四月から天守閣の芯柱の精密調査にとりかかる。

昭和三十年九月には姫路城修理事務所が設置され、昭和三十一年天守閣の解体再建プロジェクトが本格的に動き出す。

昭和三十二年四月、大天守閣の解体工事が始まり、この解体修理工事に寝食を忘れて奔走する。特に大天守の芯柱二本は長さ二十五メートル、直径八十二～九十五センチメートルもある芯柱探しが始まり困難を極めたが、昭和三十四年にやっと調達することができた。

昭和三十三年一月、天守閣の解体工事が完了した。

昭和三十九年六月、八年の長期にわたるこの大天守閣の修復工事を無事完成させた。

昭和四十年、得二はこの姫路城の大修復工事を最後に、文部省を定年退官し、姫路市郊外に末娘、四女の昭子夫婦と共に定住する。ときに六十二歳であった。

平成五年十二月十日、姫路城は、法隆寺と共に日本で初めて世界遺産に登録された。これを待っていたかのように、翌年姫路市菅生台で、家人にみとられて静かに九十一歳の生涯を閉じられた。

設楽町にこのような偉大な仕事を残した匠がいたことを誇りに思います。ちなみにこの姫路城は現在、平成の大修復工事が実施されておりますが、一度この現場を見学するのも、さらに加藤得二の偉大さが理解できるのではないでしょうか。

紙面の都合で、多くを伝えることができませんでしたことをお詫びするとともに、機会があればまた、同門の匠を紹介したいと思います。

（敬称略）

〔引用文献〕

・プロジェクトX挑戦者たち
新たなる伝説、世界へ
（巻十一）

編者・NHKプロジェクトX
制作班
発行者・松尾武
発行所・日本放送出版協会

（設楽町文化財保護審議会委員
村松豊太郎）